

生活把握の方法と課題

市 川 孝 一

A Critical Review of the Studies on the “Living-Structure”

Koichi Ichikawa

The purpose of this paper is to make a critical review of the studies on the “living-structure” by some sociologists. I re-examined the methods and perspectives of these studies and pointed out some problems included among them. At the same time I presented one perspective concerning how to grasp our “living-structure” from the view point of the studies named “Seikatsugaku”. In other words, I tried to make clear some approaches which are important when we comprehend our “living-structure” and our ordinary living.

はじめに

本稿の目的は、生活というものをいかにとらえるかという問題に対し、従来から提起されているいくつかの方法と視点を検討し、あわせて筆者なりの「生活学」の視点からの生活把握の方法とそれに関連した諸問題を考察しようとするものである。

I 生活とは何か

「生活とは何か？」などという大上段に構えた問いを發せられると、われわれは当惑してしまうだけである。それは、あまりにも大きく漠然とした問いであって、それに明快で簡潔な解答を与えることは困難である。

確かにことば自体の辞書的説明であるなら、それは“生きて活動していること”であるが、これはしょせんことばの置き換えにすぎない

といわれてしまう。われわれが生きていることが生活であるには違いないのだが、ただ生きているだけでは生活にはならない。「生活」と「生存」とが区別されるゆえんである。

「生活とは何か？」という問いがわれわれを当惑させるもう一つの理由は、生活というものがあまりにも身近かなものでありすぎるために、改めて対象化することが困難だからである。この辺の事情は、「文化」というものが、あまりにも身近かなものであるが故に対象化されにくいのと似ている。

従って、個々の人々の“生活”についてのイメージが種々雑多であるのはもとより、学問的な対象としての生活のとらえ方もまた様々である。例えば、生活は「消費生活を中心とする私的な経済生活」(注1)であったり、「次の世代をひきつぐ子どもの出生とその育成、

(注1) 国民生活研究所 (1969) p. 8

労働力の再生産のために形成された血縁集団の共同生活」(注1)としてとらえられる。しかし、これらは、「消費生活」や「家庭生活」というあくまでも生活の一部、一領域に焦点をおいたもので生活全体の把握のためには、つまりトータルな総体としての生活をとらえるためには問題が残るだろう。そこで、われわれは、抽象的になることは覚悟の上で、「生活というのは、きわめて包括的かつ体系的な、人間の生きるという行為の全体といえる」(注2)とか、「……生活とは、よりよく生きるという目的に向かって展開される生活行為の複雑な体系であり、目的志向的な各種の生活欲求が、一定の社会的状況のもとで、各種の生活手段を用いながら、その充足を目指して、各種の生活行動を選択して遂行される過程である」(注3)というような生活の定義づけから出発しなければならないだろう。

II 再生産過程としての生活

生活を原理的、理論的に把握するという試みに最も積極的に取り組んでいるのが、上にあげた松原治郎氏をはじめとする「生活構造論」の研究者たちであろう。生活の構造的把握とか、体系的把握ということになると従来からのものでは、何といても生活構造論の理論的貢献が最も大であるということである。そこで、ここではまず、生活構造論における代表的な生活のとらえ方の視角をみていくことにしよう。

その第一のものは、生活を再生産機能において、あるいは再生産のプロセスとしてとらえる視角である。先に生活を“生きて活動していること”と説明するのは単なることばの置きかえとあったが、生活を原理的にというか、原点にもどってとらえる場合には、この置きかえは必ずしも悪くはない。生活＝再

生産過程というとらえ方の発想の基礎には、生活を“生きることを何かしている”という機能そのものにおいてとらえるという見方があるからである。なお、このとらえ方のさらに出発点にまでもどっていくと、生活＝生命の生産というところまで行きつく。つまり副田義也が言うように、人々のいとなむ生活は、その多様性の枝葉を落としていった場合、次のような共通する要素の連関としてとらえられる。つまり、生命の生産→生命の消費→生活手段の生産→生活手段の消費→ふたたび生命の生産→…という循環式である。

(図-1参照(注4))



図-1

これは、生活の最も原初的な姿をとらえたものだが、一歩進んで、生活過程に、労働→収入→生活に必要なもの(物、サービス、情報)の購入→生活用具によるその変形つまり消費行動→生活そのものの再生産(経済的・社会的・文化的・肉体的)という循環を見、生活を再生産のプロセスととらえているのが松原治郎である。(注5)

つまり、人間は、生きるために複雑多岐にわたる再生産活動をしているというわけであるが、この再生産のプロセスを、より精緻な構造＝機能体系としてとらえると、さらにそれは大きく次の4つのものとしてとらえられるという。

①物質の再生産 自然に働きかけ、「物」を作り、あるいは作りなおす。

(注4) 副田義也(1971) p. 50 : 図は同p. 51

(注5) 松原治郎(1971b) p. 112松原によると再生産のプロセスである人間生活のメカニズムこそが「生活構造」であり、この生活構造という再生産のメカニズムをシステムのにとらえる方法がいわゆる「生活構造論」だという。以下の議論は松原(1971b) pp. 112-118参照。

(注1) 籠山京(1968) p. 2

(注2) 松原治郎(1973) p. 4

(注3) 松原治郎(1971a) p. 5

- ②組織の再生産 人間が人間に働きかけて、「社会」を作る。
- ③精神の再生産 知的・感情的・文化的な世界、つまり「精神」を作りあるいは作りなおす。
- ④生命の再生産 肉体的エネルギー、つまり明日の活力である「生命」を作る。それはまた次の世代という生命の生産をも含む。

この4つの再生産活動を再生産の機能的展開として図式化すると、図-2のようになる。

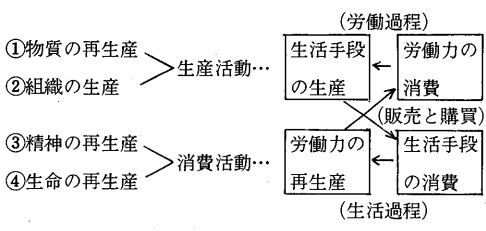


図-2

つまり、生活とは、次のような循環過程をなす、人間のいとなみとしてとらえられるというのである。「労働力の消費」(労働過程) → 「生活手段の生産」 → (生活手段の販売とその購買) → 「生活手段の消費」 → (生活過程) → 「労働力の再生産」 → (労働力の販売とその購買) → 「労働力の消費」……。

図からも明らかなように、現代の複雑な社会では、生産と消費の経済的循環は、単に物質の再生産と生命の再生産の単純な繰り返しとしてだけではなく、高度に組織の再生産と精神の再生産をとともなって複雑になっている点が注目されている。

そして、さらに、高度大衆消費社会の進展

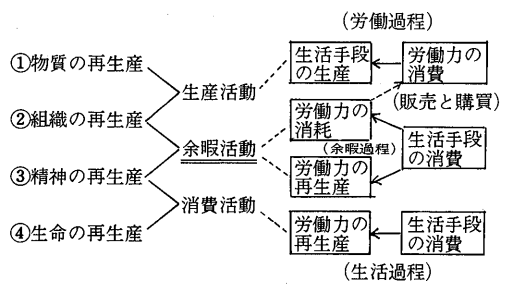


図-3

にともなって、組織-精神の再生産がクローズアップされ、この両者の接点のところに、社会的・組織的な精神の再生産としての、「余暇活動」が独立してあらわれることをふまえて、松原は、図-2であらわされた生活の機能的展開の図式が、より精緻な姿として図-3のように書き改められることを示している。

こうして、われわれの生活は、個人のおかれた一定の状況下で、一定の方向と範囲で整理され、体系化された「循環」の過程としてとらえられており、それらの生活機能を全体として秩序づけ、体系化を可能にさせている要因として、次の6つのものが“生活の構造的要因”としてあげられている。

- (A)時間 (生活時間構造) 労働と余暇と消費の時間的配分
- (B)空間 (生活空間構造) 職場・余暇場面・家庭の空間的拡がり
- (C)手段 (生活手段構造) 生産手段・消費財の所有・配置
- (D)金銭 (経営・家計構造) 経営・所得の規模・家計の配分状況
- (E)役割 (生活関係構造) 家庭内の役割分担・権力の布置
- (F)規範 (生活文化構造) 家風・しきたりや文化

松原はこのうち(A)(B)を外制的要因、(C)(D)を媒介的要因、(E)(F)を内部的要因と名づけているが、以上の議論から、われわれの生活は集約的に次のようにとらえられる。「こうして人間は、一定の時間の枠の中で、一定の空間を占めながら、物的手段と金銭に媒介され、かつ役割関係や規範を作りながら、生活機能の循環的なパターンを維持していく。このパターンこそが生活構造としてとらえることのできる生活の本体なのである。」(注1)(表-1参照)

(注1) 松原 (1971b) p. 116, 表は, p. 117松原はついで、この一般的生活構造を家庭生活の構造(家族の生活構造)のレベルに置き直して具体的な生活行動を検討しているが、他の研究者も含め、生活構造論はあまりにもいわずぎていのではないという気がする。

表1 生活構造の関係

構造的要因		(A) 時間	(B) 空間	(C) 手段	(D) 金銭	(E) 役割	(F) 規範
機能的側面	①物質の再生産	生活時間構造 (労働と余暇と消費の時間的配分)	生活空間構造 (職場・余暇場面・家庭の空間的拡がり)	生活手段構造・消費財の所有・配置 (生産手段・消費財の所有・配置)	経営・家計構造 (経営・家計構造)	生活関係構造 (家族内の役割分担・権力の布置)	生活文化構造 (家風・しきたりや文化など)
	②組織の再生産						
	③精神の再生産						
	④生命の再生産						

Ⅲ 生活行為体系としての生活

さて、生活構造論における生活のとらえ方のもう一つの視角は、生活を“よりよく生きるという目的に向かって展開される生活行動の複雑な体系”と規定する生活の定義からも明らかのように、生活行動そのものの体系的把握を目ざすというアプローチである。

生活行動は、人間行動一般のうちでも、とくによりよく生きるという目的に向かって展開される目的志向的に強く意味づけられた行動であるために、「生活行為」と呼ぶ方がベターだとされるが、松原や青井はT. パンソズに従って、生活行為のプロセスを次のようにとらえている。(注1)

つまり、人間の生活行為は、①動機づけのエネルギーを使用し、②規範や価値によって規制されながら、③一定の状況の中で起き、④欲求充足に必要な限りで、環境から物財やサービスや情報などを「手段・便益」として取り入れ、⑤「目標達成」をめざして行なわれる——というのがそれである。

これは、図-4のような図式として示すことができるが、これについては多少コメントが必要であろう。点線の内側が状況、外側が環境とされているのは次のような意味がある。環境のすべてがわれわれの生活にとって意味

(注1) 松原 (1971b) p. 104, 松原 (1971a) p. 8 青井和夫 (1971) pp. 144-145

をもつのではなく、われわれが利用し得る条件を取り入れ、それを生活行為の手段とした時に、それは生活行為の過程にとっての状況となるというわけである。さらに、動機づけ、役割、規範の場合も、行為にとって環境として存在するパーソナリティ体系、社会体系、文化体系の中から、その行為に必要な要素を状況に取り込んだときに成立するということになる。同様に、目標は価値体系の一部であり、手段・便益は自然・物財体系・社会体系・パーソナリティ体系・コミュニケーション体系の一部である。もちろん、どの部分が状況の中に取り入れられ、どの部分が環境の中に取り残されるのかは、行為の場面によって異なり、ア・プリオリに決定はできない。

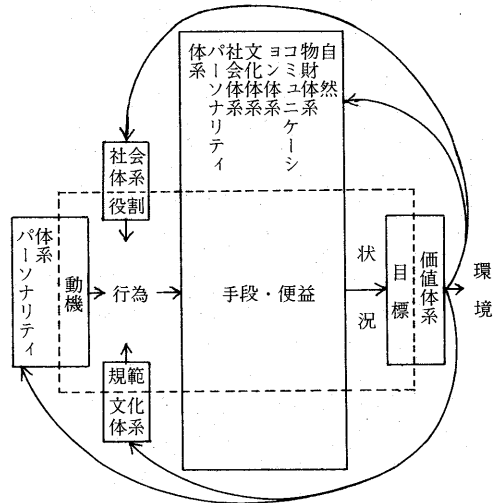


図-4 (注2)

そして、上記のようにとらえられた特定状況下における動機・役割・規範・手段・目標は、そこで発生する行為の「構成要素」または行為の「規制要素」とよばれる。いろいろな状況下での行為そのものが、ひとつのシステムをなすものとすれば、これらの「規制要素」「構成要素」のそれぞれも相互に有機的

(注2) 松原 (1971a) p. 9, と青井 (1971) p. 145を合体した。

に関連しあって一つのシステムを構成している。青井は、前者を「生活行為体系」、後者を「規制要素体系」と呼び、この両体系の結合を「生活体系」としてとらえている。(注1)

さらに、図4の外側にのびた実線でも明らかのように、ある特定の行為は目標達成によって一応の区切りがつくが、行為は単発的なものではなく、ひとつの行為が次の行為を呼び起こし、まさにひとつのシステムとして、無教の行為の有機的連鎖をなしているのである。ことばをかえていえば、一つの行為は、必ず何らかのアウト・プットを生じ、そのアウト・プットが、社会体系、文化体系等にインプットされ、それらをつくりかえ、状況と環境そのものを変化させていくのであり、ある行為のアウト・プットは、行為の規制要素にイン・プットされ、新しい行為が“再生産”されていくということになる。

もう一つ、この生活体系論のアプローチには、生活行為の循環体系を、各種の動機づけの側面にわけて、とらえることによって具体的な生活行為の発現の様態を明らかにしようという試みがある。例えば、松原は、例のAGIL図式に沿って、生活行為の動機づけの側面に、次の5つの次元を区別している。(注2)

①環境適応次元の動機づけ (adaptation)：環境から資源(生活資材)や情報を継続して取り入れ、手段として整えるという次元での生活行為の動機づけ。

②目標達成的次元の動機づけ (goal attainment)：利用しうる生活資材や用具(知識・技術・道具等)の組織化を図り、生きるという生活目標をより具体化させ、目標達成への方策にしたがって、役割配分するという次元での生活行為の動機づけ。

③内部統合的次元の動機づけ (integration)：手段適応や目標達成に必要な限りでの内部統制、組織参画、そこでのパーソナリティの

コントロール等を志向する次元での生活行為の動機づけ。

④潜在的価値維持の次元の動機づけ (latent pattern maintenance)：人の内面的水準や自我価値の維持を図ろうとする営みの次元での生活行為の動機づけ。

⑤緊張处理的・リラクゼーションの次元の動機づけ (tention management, relaxation)：生活において生じたストレスを解消し、緊張をリラックスさせたいという次元での生活行為の動機づけ。

この5つの次元で動機づけられた生活要求は、それぞれの生活環境の物理的状況や集団状況、さらには文化状況に規制されながら、生活行為のプロセスを展開していくものとされている。(これらは、単純化して、A生活の経済行為、G生活の政治行為、I生活の社会統制 L生活の教育・文化活動、R生活の余暇行為と呼ばれる)

このAGIL(R)図式に、手段的——表出的、社会的——個人的という軸を組み合わせ、松原は、住居を具体的な例として、その分析的把握の一端を示しているが、これは以上紹介してきた生活体系論の有効性を示す一例なので、これを最後にあげておきたい。

(注3) (図-5参照)

例えば、個人的セクターにおいて手段的機能を果す空間、——台所や家事作業の場所等——は、適応的(家事的)動機(A次元)に対応するものであり、社会的セクターでの手段的機能を果す空間——食堂等——は、家族成員に共通の目標達成(家政的)への動機(G次元)に対応しているという風にこの図は読める。

こうしてみると、現実の住環境、居住空間に含まれる問題点が極めて明瞭にクローズアップされてくる。つまり、居住空間として、最低限必要なものは、このAGILRのそれぞれに対応した空間が確保された住まいという

(注1) 青井(1971) p.146

(注2) 松原(1971a) p.10, 松原(1971b) p.106

(注3) 松原(1971a) p.11, 松原(1971b) p.108

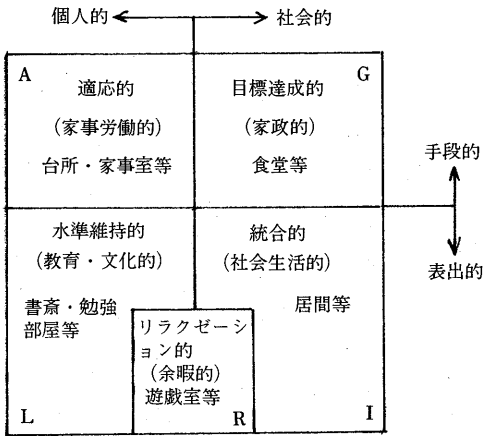


図-5

ことになるのだが、例えば、日本のいわゆる2DKとか3DKといった団地型の住居では、せいぜいのところ、A次元とG次元に対応する空間しかそなえていない、まことに居住水準の低い住まいということになる。

IV. 再び生活とは何か

以上みてきたように、生活構造論の生活把握は——改めてここで感心する程のことではないが——結局は（という単純化をすれば）マルクスとパーソンズということになる。これらの理論によって、確かに生活というものはその「体系」なり「構造」がきれいな図式として、とらえられることになる。

しかし、これらは、あくまでも一つの既存の理論という武器で生活を切っただけに見せたにすぎない。学問や理論というものはそもそもそういうものであるといわれればその通りだし、「生活学」独自のアプローチによって、生活を見事に解明して見せることができるというわけでもない。これは批判にもならないし、全くレベルの違う問題ではあるが、“生活者の実感に即した”生活の解明を目指す「生活学」の立場に立つとやはりここで、ある種の不満と、“何か違うな”という感じを受けざるを得ない。

そこで、再びここで生活とは何かという最初の問題にもどって、筆者なりの「生活学」のイメージを示してみようと思う。生活というものをとらえる際に、生活ということばをさらに平易で身近な表現である「暮らし」ということばに置きかえてみるのが意外に役立つと前から考えている。「暮らし」ということばには、①生計・家計 ②日常生活という二つの意味が含まれているが、従来生活研究として行われてきたものは、主に①の意味の暮らしに焦点が置かれたもののように思われる。経済学や家政学における家計研究がその代表的なものであろう。しかし、筆者は、むしろ暮らしのもう一つの側面にこそ注目すべきではないかと考える。つまり、日常生活という意味での暮らしである。生活のこの側面は、従来ほとんど学問的研究の対象として注意を払われずにきたように思われる。われわれの日常生活は、あまりにも身近なもの“卑俗なもの”であるがために、また、まさに文字通りその“日常性”ゆえに、学問的研究の対象としては、魅力のない——さらに言うなら取り上げるに値しない——領域として等閑視されてきたのである。だが、よく考えてみると——あるいは考えるまでもなく——これこそがわれわれの「生活」であって、ここを無視しては、生活学は成り立たないと思われる。

そこで、筆者自身の考える生活学のイメージをひとこと言えれば、それは、われわれのごく身近な日常生活における具体的な生活行動や生活事象の持つ意味あいを考察することに焦点が置かれたものであるということになる。生活行動とか生活事象とかいう言い方には問題も多いが、例えば「風呂に入る」ということは立派な一つの生活行動である。だから“「風呂に入る」ということは一体どんな意味を持っているのか？”と問うことは、十分に生活学的な問いだといえるわけである。そして、こうした問いに対する解答の与え方

には、二つのよくとられる方法がある。一つは、「風呂に入る」という生活行動の位置づけが歴史的にどのように変容してきたかという視点から、それに対し歴史的ないし文化史的な解答を与えることである。つまり過去の生活の中でのある特定の生活行動の位置づけ、意味づけと、現在の生活におけるそれとの異同を問うことによって、現在の生活における当該の生活行動の持つ意味を浮かびあがらせるという方法である。もう一つは、同似の生活行動が他の文化においてはどのような位置づけをされているかを問うことによって、われわれの文化の中におけるその生活行動の持つ意味づけの特質を明らかにしようというものである。今の例でいえば、日本人が「風呂に入る」ことと、欧米人が「風呂に入る」こととの間にはどのような共通点と違いがあるのかを比較することによって、両者の「入浴文化」の特質を明らかにするというのである。（なお、ここで盛んに「意味づけ」とか「位置づけ」ということばを使ったが、重要なことは、生活主体＝生活者にとって、ある生活事象や生活行動がいかにとらえられているのかということであるから、この表現においては psychological なそれ、——つまり psychological な「意味づけ」なり psychological な「位置づけ」——が大きなウエイトを持っていることはいうまでもない。）

さて、以上のことをもう少し一般的なことばで表現すれば次のようになる。つまり、筆者のイメージする生活学とは、個々の具体的な生活行動や生活事象の持つ意味を明らかにすることが主要な課題であり、その方法には、一つは歴史的な、いわばタテの比較をする文化史的・社会心理史的アプローチがあり、もう一つは空間的な、いわばヨコの比較、いわゆる比較文化的 (cross-cultural) なアプローチがあるということである。もちろんこの二つのアプローチは、相互に対立するものとしてあるのではなく、相互補完的なものと

してあることはいうまでもない。だから、理想的には、この二つのアプローチがともに十分展開されたときに、ある生活事象の位置づけ、意味づけは成功したということになるだろう。

そして以上に述べたようなアプローチによる「生活学」の試みの具体的な例としてあげられるのは、加藤秀俊氏の一連のいわば「日常性の社会学」シリーズとでもいうべき諸著作(注1) “京大グループ”の共同研究の成果(注2)等が代表的なものだと思われる。

しかし、こうなると、生活学といいながらその中身は、「生活文化論」のことではないかという疑問と批判が当然出てくるとされる。上にあげられたものは、まさに生活文化論であって、確かに、それらは面白いけれど、——その博識には感心させられこそすれ——断片的で、思いつきのエッセイにすぎないという批判がよく向けられる。筆者も、この点については否定しないが、生活学ということばはポピュラーになりつつあるものの、これが生活学であるというような確固たる体系をもった学問がすでに出来上っているわけではない現状では、むしろ数多くの自由な“生活学”の提示があることが望ましく、それらのぶつかり合いの中から、もし生活学という独自の領域があるとするなら、新しい学問分野が確立していくことになるだろう。

こう考えてきた時、われわれの生活研究に最も重要な示唆を与えてくれるものの一つは、既存の学問領域でいえばやはり民俗学であろう。例えば、宮本常一が民具を論じた小論の中で紹介されている例は実に興味深い。(注3) そこで取り上げられているのは足半あしなかというワラで作った履き物であるが、これを調べて行くうちに日本の有形文化の中でワラの利用に

(注1) 加藤 (1971 a, 1971 b, 1973, 1974, 1978, 1979, 1980)

(注2) 梅棹他 (1962, 1971, 1977)

(注3) 宮本 (1976)

よるものの占める位置の大きさに気がつく。稲を作っている民族は東南アジア全体に広がっているのに、日本人ほどワラを利用している民族は他にない。ワラの利用が極端に高いのは、日本のワラがやわらかいワラだからである。米の中で一番ワラのやわらかいものは餅米である。米をつきつぶして餅にして食べるという習俗が最も盛んなのは、日本人においてである。——という以上のような道筋で、足半という一つの民具を追求していくことによって、日本人の食性や食習慣の特性との関連までもが明らかにされているのである。さらに、ワラの問題を追っていくと、「刈り分け」(＝ワラをついたままの米を納める)「半々」(＝米だけが半分行きワラは全部残る)「ワラ小作」(＝米は全部地主に行きワラだけをもらう)というような小作料の問題にまで行きつく。小作料の問題となれば、これはまさに経済・社会構造の問題である。また、他方で、足半という履き物が履き物の中で一番多くの呪術的なものを含んでいることにも言及されている。こう見てくると、足半という一つの民具を手がかりに、われわれの生活というものがいかに体系的、構造的に成立しているかということが具体的に生き生きと浮び上がってくる。さらに、もう一步進んで、ワラをめぐる生活文化論を進めていくと、日本における畜産の欠落という事実に行きつく。そうするとワラを原材料とするさまざまな民具は、実は、畜産にともなう副産物、つまり手皮とか毛織物と機能的に全く同等なもの、その代替物であったという比較文化的な考察まで可能になってくるといふわけである。(図-6参照)

以上紹介してきたような、生活のとらえ方こそ実に生活学的な生活把握ではないかという気がする。民俗学の場合、ここに示された民具というものに象徴的なように、「古いもの」「農村の生活」というイメージがぬぐいきれないという人がいるかもしれないが、それなら、民具というのを一般に生活具と置きか

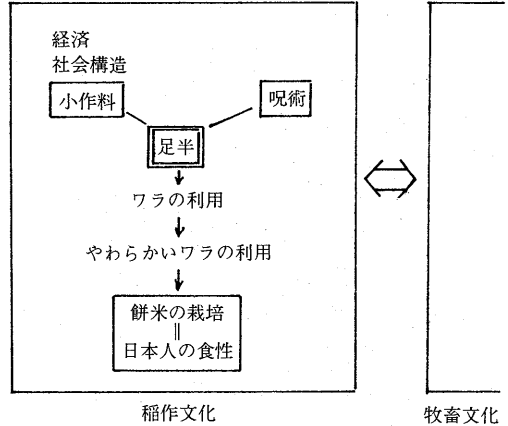


図-6

えてみたらどうだろうか。つまり民具を生活具に常民を生活者に置きかえ、もしわれわれの日常生活の中にある一つの「モノ」を核にして、上に紹介したような、生活の構造的、体系的拡がりを把握できたら、これこそ一つの立派な“生活学”になるのではないかと思うのである。

引用及び参考文献

- 青井和夫 (1971) 「生活体系論の展開」
青井・松原・副田編『生活構造の理論』有斐閣 所収
- 中鉢正義 (1975) 『現代日本の生活体系』ミネルヴァ書房
- 籠山 京 (1968) 『生活経営学』光生館
- 国民生活研究所編 (1969) 『生活経営学』至誠堂
- 加藤秀俊 (1971 a) 『生活考』文化出版局
—— (1971 b) 『暮しの思想』中央公論社
- (1973) 『続暮しの思想』中央公論社
- (1974) 『日常性の社会学』文化出版局
- (1978) 『食の社会学』文藝春秋
- (1979) 『習俗の社会学』PHP研究所

———— (1980) 『衣の社会学』文藝春秋
川添登, 高取正男, 米山俊直編 (1976) 『生
活学ことはじめ』講談社

松原治郎編 (1971 a) 『現代のエスプリNo.52
現代人の生活』至文堂

———— (1971 b) 「生活体系と生活環境」
青井他編『前掲書』所収

———— (1973) 『生活優先の原理』講談社

宮本常一 (1976) 「民具論」『民具と生活』
ドメス出版 所収

副田義也 (1971) 「生活構造の基礎理論」青
井他編『前掲書』所収

梅棹忠夫, 林屋辰三郎, 多田道多郎, 加藤秀
俊 (1962) 『日本人の知恵』中央
公論社

梅棹, 加藤, 小松左京, 米山, 佐々木高明
(1971) 『日本人のこころ』朝日
新聞社

梅棹, 小松, 谷泰, 石毛直道『新, 日本人の
こころ』朝日新聞社

米山俊直 (1979) 『暮しの探検』PHP研究
所

(1980年9月26日受付)